

ひとりひとりの子どもを見つめて

⑤

赤羽 美代子

卒園式を目前にしたある朝、三歳児のDがいつになく頬を薄く赤らめて、頭の前から足の先まで、「僕は生きているんだ」と主張しているかのように、スキップをしながら園の玄関に入ってきた。日ごろのDは、親譲りか、幾分青ざめた顔である。D

の母親は、特別短気な気性の人で、Dの入園した頃の二、三か月間は、Dに対して言葉と手がほとんど同時に出る短気さであった。例えば「Dちゃん、だめ、だめ、早く、早く、まだ分からないの！」ピチャッ、ピチャッ（Dを叩く音）といった具合で、Dが母親とゆっくりと会話をする姿はあまり見られなかった。

Dはいつも、肩から掛ける布製の鞆の紐を手にとって、鞆をぶんぶん回しながら園の玄関に入ってくる。「Dちゃん、お友だちに鞆がぶつかるといけないよ」と言う教師の言葉に、すねて、その鞆をぶつけてくる。

そんなDも、母親も、最近はずっかり落ち着いて、一年の終りを迎えようとしているある朝のでき事である。

めずらしく頬を染めて愉快そうに入ってくるDを迎えて、瞬間、何かあるかと直感した。「Dちゃん、お早うございます」の教師の声に、Dはちょっといたずらっぽい顔をして、私の顔を見ながら、脇の鞆を両手でぎゅっと抱え込むように、上から押えてみせる。その後から、今登園して来た仲良しのYが「お早うございます。あれ、Dちゃん何か持ってるの？」と聞く。

Yが早くも行動開始とはかりにDの鞆を覗き込む。YとDは、毎朝どちらが先に登園してきても玄関で待ち合う仲の良さである。Yのはりきった問いに、Dはやや興奮気味で「あ、Yちゃん、Yちゃんにだけ見せてあげるね」と言いながら、玄関の隅っこにYを引っばって行く。寝相でついたのか、くるっと上に巻き上がった、ちよっと赤毛の髪の毛を、ふわりふわりとゆら

して、角の隅で、Yに自分の鞆の中を覗かせている。Yは、薄暗い場所なので鞆の中がよく見えないのか、品物が理解できないのか、「出して見せてよ」と、Dに言っているらしい。Dは「ひみつ、ひみつ」と、声にならない声で言いながら、こそこそと出し始めた。「お早うございます」と、つぎつぎに子どもたちが登園してくる。そして、隅っこで「ひみつ事」をしているDとYを見つけては「何をしてんの？」と、いぶかしげに寄って行く。Dを中心にして、たちまち五、六人の三、四歳児の集団ができた。私も見に行きたいのだが、どうも教師には内緒の事らしい。

その、隅っこの場所は、いかにも「ひみつ」には良い場所なのである。適当に光をしゃ断している。蚊の集団発生でもしそうな、湿り気と、不気味さもある。人が通る道をちょっと避けている。子どもたちが寄ってたかってこれから繰り広げる未知の世界が、どんどんふくらんでいくには、いかにも格好な場所である。暗黙の相談事が、子ども同志間には、見えない糸でつながっていきらしい。ちらっ、ちらっと子どもたちは、私に視線を投げては、肩をつぼめ合ったり、笑ったりしている。

私は、Dが一体何を持ってきたのか、子どもたち以上に、む

ずむずとなり、見てはならない物を見たい気持ちをこらえた。暫くは、ぜんぜん気にしてはいない振りをしてみたり……。『見せて！ 見せて！』と声に出してみたり……。子どもたちもその都度、「だめ、だめ」とか「ねー」と頷き合ったりしながら、囲いの輪を、ちぢめたり、ふくらませたりしている。集団の中心人物になったDの得意な顔が、手にとるようである。

その時、私は電話で呼ばれた。近くにいた四歳児の担任のT先生に「ちょっと、あそこで面白い事がおきているので、様子を見ていてね」と言いおいて電話に出る。電話の後、五分程して戻ってくると、そこには先き程の「ひみつ」の光景は見られなかった。なぜか、淋しく、緊張した空気が流れている。先き程の場所から、子どもたち全員が移動していて、下駄箱の前で、Dがむっと、いつもの青白い顔で立っている。その周囲には、他の子どもたちが、同じくむっとり立っている。

今しがた、幼児たちを暖かく迎え入れてくれたあの薄暗い隅っこが、がらーんとしていて、何か冷えびえと、大きな口をあけているようだ。

其の後のDの様子を、次号に記す事とする。

(靈南坂幼稚園)